滋賀短期大学研究紀要
第 48 号 Vol.1 2022 年

マリア・モンテッソーリ教育学とファンタジー

Maria Montessori Pedagogy and Fantasy

保田 恵莉*
滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Eri YASUDA
Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

Abstract: What cultural traditions are reflected in the basis of Montessori pedagogical thought? In this article, I strangled the characteristics of Italian culture that cultivated Maria Montessori's human being. Lack of fantasy in children's culture is pointed out in Italian Culture. However, Montessori pedagogy values the independences and creativity of children. Relationships between people who love Italian culture thrive in parent-child relationships. From this, the influence of the Italian historical background can be considered. I would like to explore Montessori pedagogy, which transitions from visual fantasy to invisible religious education.

キーワード:モンテッソーリ教育学，イタリア文化と児童文化，ファンタジー，
主体性と創造性
Keyword: Montessori Pedagogy, Italian Culture and children's Culture, Fantasy,
Independence and Creativity

1．はじめに

2002 年,現在から 20 年前の日本モンテッソーリ学会シンポジウムで「イタリア文化」について議論され,我が国を代表されるイタリア教育史の研究者である前之園幸一郎氏を始め,オムリ慶子氏,モンテッソーリ教育コンサルティング伊藤初美氏,その他,司会を務められたモンテッソーリ教師の書かれたシンポジウム概要を当時,公立幼稚園で拝読させていただいた

*E-mail:e-yasuda@sumire.ac.jp

ことがある。イタリア文化と児童文化,モンテッソーリ教育学とファンタジーへの関心と追求から,本稿でこのテーマを探求することにした。

モンテッソーリ教育学は，イタリアの女性博士 Maria Montessori（1870-1952）が， 20 世紀初頭，こどもの心を重んずる新たな思想を提唱した。仮にモンテッソーリ教育学が乳幼児教育の基礎的部分と関連性を持ち,こどもを育成する本質を見極めているとするなら,マリア・モンテッソーリが発達に遅れのあるこどもの研究を確立していったイタリアの国について関心を深めることには意義があると考えた。さらに,「ファンタジー」という言葉の持つ神秘と歴史の繋がりについて,日本モンテッソーリ学会シンポジウムの資料を参考にもしながら,モンテッソーリ教育学を追行するイタリア文化と児童文化の中から考察していきたい。

2. イタリア国の信仰と祈り

ローマのサン・ピエトロ大聖堂に象徴されているように,イタリアはカトリック信仰の盛んな国であり,都市や街の至る所に教会が位置されている。カトリック信仰の主の祈りが日々の生活に欠かせない。フレンツェのサンタマリア寺院を再現するかのように現代の日本のモンテッソーリ幼児園では聖フランチェスコ（1182-1226）の次のような祈りの言葉が引き継がれている。

『主よ,イエスキリストよ,私を主の平和の道具としてお使いください。悲しみのある所に喜びを,憎しみのある所に愛を,暗闇のある所に光をも散らすことができますように』,『慰められることよりも慰めることを,理解されることよりも理解することを,愛されることよりも愛することを,主よ,私が望むようにさせてください』

祈りの言葉は,カトリック教会やモンテッソーリ幼児園だけでなく,今もイタリアにおける自主的ボランティアの精神として,フレンツェ市の Misericordia（ミゼリコルディア）を拠点として息づいている。可哀想な人に「Miseri」,人間の優しい魂を「cor」,与えなさい「dia」,の持つ意味を幼いこども達も吸収しながら正常化を遂げていったのであろう。

さらに，モンテッソーリ教育史の先駆者である前之園幸一郎氏は,ルネサンス期における文化的繁栄の栄光の裏側に陽の光の当たらない問題が起きていたことを指摘した。イタリア国の信仰と祈りの陰に潜む痛ましい出来事の一つに,赤ん坊の捨て子が頻繁に起こる事件があった。新生児は早く見つけてもらわなければ命を亡くすこともあり,援助の手が必要な時代であった。現代からおおよそ 80 年以前の出来事ではあるが,赤ちゃんポストのような捨て子のための養育院がフレンツェ市に存在したことも事実のようである。しかし,当時の赤ん坊の捨て子は,現代社会の「こども虐待」とは,異なるものであり,生活が貧しく,赤ん坊を育てられないことに

悩み抜いた母親が深い愛情を持ちながらも我が子を捨てなければならなかった。母親の中には,赤ん坊の掌に名前を刻んでいた者や,マリア像を傍に置いていた者もいたようである。

イタリア文化で肯定されるファンタジーとは,現実的であり,視覚的な要素が強いと言われている。信仰と祈りの根底に,マリア・モンテッソーリが願ったような「こども中心であること」,「こども自身が幸せであること」の実現が,信仰や祈りにより叶えられる機会が少なかったこともその理由の一つではないかと考える。

3. ファンタジーの捉えと歴史

ファンタジーの捉えは曖昧であるが,ファンタジーとは何かというと,空想・幻想・超自然的な事象,プロットの主要な要素を意味する。国語辞典では,幻想曲・幻想的な文学を扱った作品などを指している。ファンタジーの漠然とした傾向としては,作品の魔法などの空想的な要素も該当し,現実にはありえなくともまとまりを持った設定として導入されており,時に,神話や伝承などから得られた着想が一貫した主題となっていることが挙げられる。場合によっては,ファンタジー的な要素はどのような位置にあってもかまわない。隠されていても表面上は普通の世界設定の中に漏れ出す形でもファンタジー的な世界に人物を引き込む形でもそのような要素が世界の一部となっているファンタジー世界の中で全てが起こる形でもありうる[1)]。ファンタジーを架空とし,世界的な作品とするサイエンス・ファンタジー（SF）をファンタジーに含める考え方もあるようだが,SF とファンタジーの作品をどちらも発表する作家たちは,SF はファンタジーのサブジャンルであると述べられる。反対に,文学におけるファンタジーは,大人向けのものとも捉えられる歴史的な経緯からファンタジーを SF の一部であるという考え方も存在した。サイエンス・フィクション研究家,SF 作家のブライアン・オールディスがこの見解を持っている。ファンタジー的（ファンタジーの性質をもつ,幻想的）を意味する英語の形容詞では,「ファンタスティック」（fantastic）,「ファンタスティカル」（fantastical）であり,日本語圏で使われる「ファンタジック」という語彙は本来の英語では誤りと言える和製英語である[2)]。

さて,ファンタジーと分類される作品が文学の世界に誕生してから,歴史を遡りその流れについて調べていく。本稿では,ファンタジーを含む作品ではなく,ファンタジー作品と人々から理解される児童文化作品に視点を当て,考察していきたい。始まりは,19 世紀初頭,グリム兄弟が執筆した『こどもと家庭のためのグリム童話集』である。時代の変容に伴い,この頃から「こども」という概念が誕生した。幼児は,小さな大人ではなく,大人が養育し,保護するべき存在となった。その後,19 世紀後半まで,デンマークの国でアンデルセンが数々の児童文化「童話集」を発表している。イギリス人「ルイス・キャロル」

は,1865 年に『不思議の国のアリス』を発刊した。世紀は流れ,20 世紀初頭,世界的に児童文化ブームが訪れる。1900 年にアメリカの「ボーム」が執筆した『オズの魔法使い』は,日本でも有名な童話である。同年,イギリスの「ボター」が執筆した『ピーターラビットのおはなし』,続いて,1911 年にイギリスの「バリ」による『ピーター・パン』,同年,イギリスの『ミルン』が世界中のこどもに喜びを与えた『クマのプーさん』の世界を文学に描いた。日本の現代社会でいまもなお,こども達を魅了する児童文化作品の数々が 20 世紀初頭に集中的に発表されている。そして,その中を探っていくと,作家がイギリス人に集中していることが理解できる。このことから,「ファンタジーの国イギリス」と,称されたのではないのだろうか。しかし,ファンタジー反響の拡大した一時からそれらの熱が引くように,ファンタジーそのものに距離間を置き,見つめるような児童文学が幾つか出現している。では,日本における全盛期と言われるファンタジーではどのようなものが挙げられるのだろうか。本稿では,宮崎駿（1941～現在）作品に着目した。

『アルプスの少女ハイジ』（1974）,『未来少年コナン』（1978）などの日本アニメは人々を魅了し,一般家庭のこども達が優しさや不思議さを毎週続きとしてファンタジーを楽しむことができるようになった。1979 年,『ルパン三世 カリオストロの城』劇場作品もその一作品である。「アニメージュ」に連載していた『風の谷のナウシカ』は,宮崎自身が脚本を描き,1984 年に映画化した。同作の成功を機に「スタジオジブリ」を設立し,『天空の城ラピュタ』（1986）,『となりのトトロ』（1988）,『魔女の宅急便』（1989）と着実にこども達の心を捉え,ブランドとして「ジブリストーリー」を日本中に定着させた。その後,宮崎は監督作品としても大きな注目を集め, 2001 年には『千と千尋の神隠し』を発表する。海外でも,ベルリン国際映画祭の金熊賞をアニメーション作品で初めて獲得した。同時に,米アカデミー長編アニメーション部門賞を受賞し,2005 年のベネチア国際映画祭で名誉金獅子賞を受賞した。

その後,『ハウルの動く城』（2004）,『崖の上のポニョ』（2008）に続き,3 度目のベネチア映画祭出品となった『風立ちぬ』を最後に長編映画に幕を閉じたが,ジブリストーリーにおけるファンタジー（夢の世界）は,いまもこどもだけでなく,人々に愛され,夢と希望を運んでいる。

マリア・モンテッソーリがファンタジーを自己の中に持っていたことは,彼女の教育思想の根底に文化的伝統が残る著書の中から感じ取れる。現在のイタリアは,ワイン工房の成功などから活気付いた国であるが,第二次世界大戦の最中は生活苦にあり,カトリック教会での祈りは,イタリア人にとって生活に必要であり,戦争で疲れ果てた人々が生きていくためのものであった。モンテッソーリ教育学の素朴なファンタジーは人々に安堵を与えた。

以下に,児童文化作品における代表的なものを「図 1」,「図 2」で紹介する。

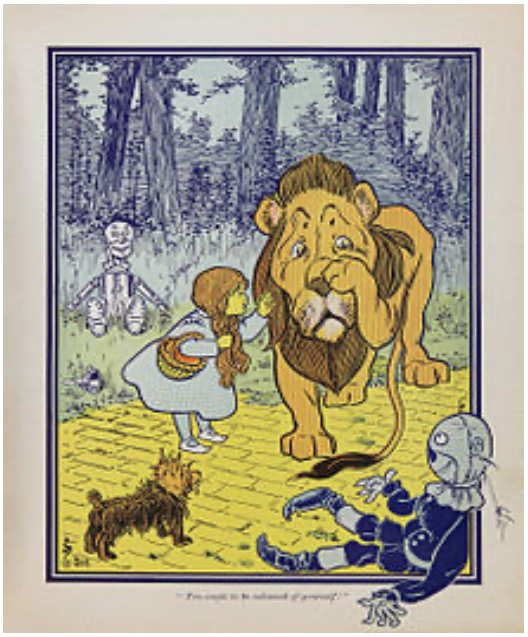


図 1: ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』(1900)イラストレーション W・W・デンズロー
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Cowardly_lion2.jpg

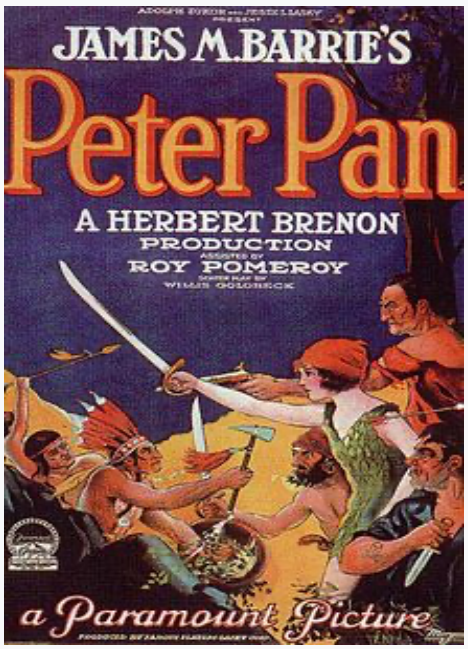


図 2: 『ピーター・パン』の映画ポスター(1924)
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Peter_Pan_1924_movie.jpg

20 世紀中期,(1950-1956),「C.S.ルイス」が,『ナルニア国物語』を執筆した。外観から思想や宗教寄りの傾向が強いとの憤りがあり,「フィリップ・プルマン」(1946 年-)は,作品にキリスト教的ドグマの込められた『ナルニア国物語』を強固に批判した。1960 年代後半,「トールキン」が執筆した『指輪物語』は北米で人気を得,その影響下で多くのファンタジー作家が登場している。トールキン作品の影響は文芸以外の形式の表現にも及んだ。しかし,作品の評価と後に与えた影響は,欧州と北米とで,かなり異なっている [3)]。20 世紀後半,1979 年,ドイツの「エンデ」は,『はてしない物語』を公表したのである。さらに,現代も生き続ける児童文学として,1997 年,『ハリーポッター』の続編に結ばれた。

4. イタリア文化と児童文化

イタリアには,イタリアのグリム童話と称される文学者「イタロ・カルヴィーノ」の作品集『イタリア民話集』が存在している。中でも,グリム童話の『赤ずきん』は,有名な童話である。『赤ずきん』に関する話の内容は,イタリアにおいても地方において少しずつ変化しているようだが,グリム童話の『赤ずきん』のように,「病気のお婆さんのお見舞いに行く」というような話ではなく,「空腹に負けた女の子

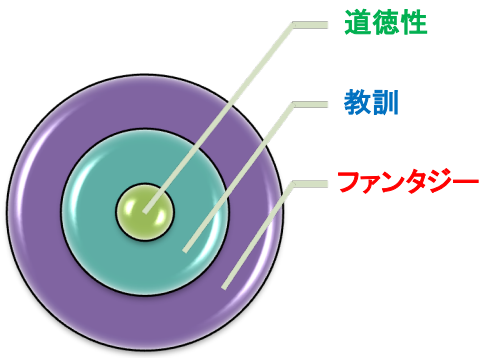
がお婆さんの歯や耳を食べてしまう」,ある日には,お爺さんにフライパンを借り,返しに行く途中にお腹がすいた女の子はフリテッラ菓子を全て食べてしまい,怒ったお爺さんに食べられてしまう」等,リアルな物語の展開が感じ取れる。欲望を達成しようとするときに,人間が戒められることや災難を招くことの一つに「空腹」と「食いしん坊」が出現し,イタリアにおけるファンタジーとは,現実的・具体的であり,視覚的でもあるということがわかる。歴史的に探っていくと,イタリアにルネサンスは起こったものの,宗教改革は起こらなかったという事実がある。このことは,イタリアルネサンスでは,絵画や彫刻・建築やオペラ等,視覚的に「見える部分」にファンタジーが発揮されたが,北方ルネサンスのように目に「見えない部分」である宗教的な語りは行われなかった。ブルクハンドがイタリアルネサンスの文化として述べているように,イタリアで当時誕生したオペラは,壮大な仕掛けを扱った視覚的パフォーマンスであったと,世に引き継がれている[4)]。

ファンタジーをイギリスの児童文化の中から考えてみると,一般的に誰もが知っている作品として『不思議な国のアリス』が浮かび上がってくる。この童話は,主人公のアリスがウサギを追いかけて夢の世界に迷い込み,様々な不思議な体験をする内容である。そこに繰り広げられる不思議な国の出来事やアリスと出会い,夢を広げ,優しい気持ちになれる読者が生まれる。

ところが,イタリアの児童文化では,大きな違いがあると言ってよい。イタリアの代表作品と言える児童文化,『ピノキオ(コッローディ作)』,『クオレ(デ・アミーチス)』を例に,モンテッソーリ教育学者オムリ慶子氏が語った一説がある。

『ピノキオとクオレ,どちらの文学もこども達だけのファンタジーが繰り広げられるというものではない。親(または,親代わりの大人,ピノキオの場合は,父親代わりのゼペット爺さんと母親代わりの仙女)が,物語の随所に登場し,こどもが間違った道に入りそうになると叱責したり,罰を与えたりしながら,こどもを正しい方向に導いていくというものである。この意味から,イタリアの児童文学は,空想的・幻想的(ファンタジー)な文学と言うよりは,道徳的,教育的なものが入る現実的,日常的なものということができる[5)]』。

図 3:「イタリア文化とファンタジー」筆者作成



「ファンタジーは,人の思考の外部を取り囲んでいると考える」(2020年8月,日本モンテッソーリ(協会)学会の発表から)

5. モンテッソーリ教育学とファンタジー

マリア・モンテッソーリは，こども中心，こども主体のモンテッソーリ教育学を世に引き継いでいる。

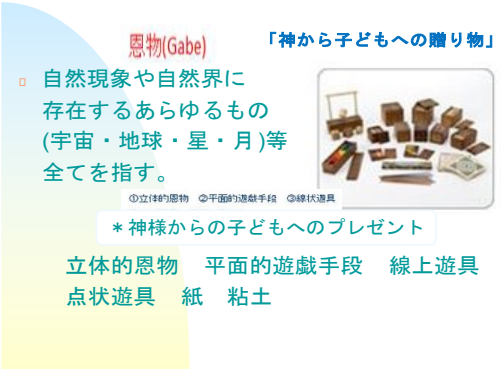
いま，日本でモンテッソーリ教育学が重んじられる理由の一つに，「乳幼児・児童虐待」が挙げられることがモンテッソーリのこの短い言葉から感じ取れる。我が国の親子関係にも問題が生じていることを文科省が指摘するように，こどもを支えるべき大人の在り方が問われているのである。前節で取り上げた『ピノキオ(コッローディ作)』，『クオレ(デ・アミーチス)』をもう一度取り上げ，例に挙げると，親と子の関係性がわかりやすい。イタリアでは，この童話のように，こどもの行動に手出しをし，口を挟むことは一般的に通常であり，こどもの自主性を尊重し，できることをこどもにさせるのではなく，過保護なまでに手出しをする。反対に，マリア・モンテッソーリが設立したローマの「こどもの家」では，障害を抱えたこどもも自主性があり，自分の事は自分でしようとする。モンテッソーリが，素朴でどちらかというと地味で目立たない内側の心理を重んじ，人間が自分で選択することの自由を大切にする裏表にイタリアの風潮が流れていた。選んだ結婚相手も人物決めを親がする傾向が強いイタリアの風潮からは，こどもの世界に夢やファンタジーを導く事が難しいとも考えられた。

児童文化は，フレーベルの著書『幼稚園教育学』の中に体系的に示されている。

『ボール遊び，積み木，遊戯，言葉遊び，あやとり，折り紙，お手玉，コマ，花壇での花や野菜の栽培，鳥や小動物の飼育と触れ合い，母親の家事の手伝い』など，

これらは，「恩物」と言われるものであり，「神様からのこどもへの贈り物」として語り継がれている。また，モンテッソーリ教育学では，遊びを「仕事」と表している。その教育法としては，人間観察に基づいた精神科学的方法（哲学的・宗教的視点）からは，自然科学に通じる科学者の精神と技術を持ちつつ，人間の内的生命力の発現を見守り，その実現に向けて援助する教師の使命を強調している[6)]。

図4：フレーベル『幼稚園教育学の中に示された恩物』宮城教育大学教育学部佐藤哲也氏指導作成：2017年（2022年6月「資料」として授業などに提示）



マリア・モンテッソーリが開発したモンテッソーリ感覚教育遊具では，フレーベル思想が影響を与えている。モンテッソーリ教育学は，こどもの潜在能力を活性化し，引き出すような教育的援助を提供する教育である。そこには，「新しく人格形成をしていくこどもの世代には宇宙の秩序と調和という統一的な考

えのなかで自己教育を進めていってほしい」というマリア・モンテッソーリの願いが存在していたのである。

5.1　愛と悲しみのファンタジー

今年も梅雨が訪れ，灰色の雲が空を流れる。この季節になると，筆者が思い描くのは，日本の文学，市川拓司作：『いま，会いに行きます』という小説である。ストーリーを簡略し，次に示す。

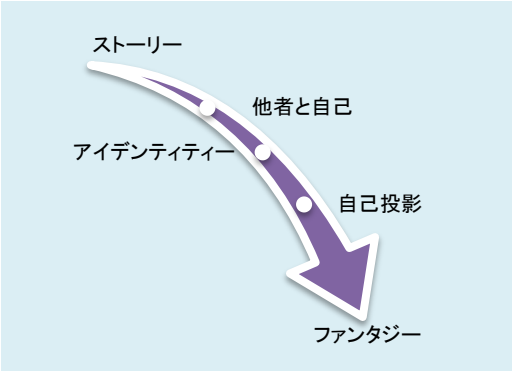
『若くして妻の澪を亡くし，6歳の息子と2人暮らしになった主人公が居る。

亡くなる前に澪は「雨の降る季節になったら，夫と息子の様子を見に来る」と約束した。そして雨の降るある日，彼女は森の中の洞窟に通じるトンネルを通り，白い洋服を纏い夫と息子の目の前に現れた。不思議な想いと神秘な感情に戸惑いながらも，家族は3人で以前のように暮らし始
める。しかし，梅雨の季節が終わり，夏空が広がるようになると，「行かなければ」と，澪は呟き，森に歩き出す。悲しむ夫と息子を置き去りにして，さようならを告げる。森の洞窟の扉は閉じられた』

命を一度亡くした人間が蘇ることは不可能ではあるが，深い愛によりファンタジーの中で，実現化される話である。最終的に，主人公は2度も澪を失うと言う非常に辛い状況に置かれる。喪失感を伴う場面も描かれているが，もう一度愛する妻に恋をし，愛情を確かめ合えたのは幸福とも言える。読者は，主人公の気持ちが純粋で，切なくなる。この共感は，ファンタジーの登場人物の中に「自己」を発見し，自ら感情を投影できるからでもある。5.1のようなファンタジー小説における登場人物は，読者側から考えると「他者」となる。一方，ファンタジーの中の登場人物は，内側の「自分」と捉えられる。作者は，現実の人間を観察することから人物像を創るのではなく，心の内なる部分で感情を表出しながら次第に統合へと動いていく。心の動きを実体に収めることが，自己統制と共に神秘な世界へと流れていく。

下記に，ファンタジーと自己投影の道筋を図式に置いた。

図5：「ファンタジーにおける自己意識とアイデンティティー」筆者作成



上図のように，人間の感情は，自己意識により，アイデンティティーを生み出し，自己投影をしながらファンタジーの世界に向かっていく。

この小説の登場人物の中に「自己」を発見し，自ら感情を投影できる筆者自身の

「共感」の部分について,加えて述べると,6月の雨の季節は,筆者にとって亡くした息子への愛と悲しみが同一化するのである。

図6:「いま,会いにいきます」筆者作品
(2002.6月)

5.2 愛と喜びのファンタジー

マリア・モンテッソーリは,著書『幼児の秘密』の中に次のようなことを記している。

『私は,自分の仕事を始めました。私は,使える種用穀物を持っています。思うままに種まきが出来る豊壌な畑を用立てていただいた農夫のようでした。しかし,それはそうでは無かったのでした。私が畑の上を触るや否や,私は穀物ではなく黄金を発見しました。土は貴重な宝を隠していたのです。私は農夫だと思っていたのですが,全くそうではないことがわかりました。私はアラジンだったのです。そして,自分では知らないまま魔法のランプを両手で持っていたのでした。それらが私に隠れた宝への入り口を開いてくれました[7)]』。

マリア・モンテッソーリは,著書『幼児の秘密』の中でまるで幼いこどものような語りをしている。イタリア文化とは異なる「メルヘンの世界」を楽しみながら,愛と喜びがあるファンタジーの世界に生きた女性であった。

彼女の教育メソッドには,幾つかの言語要素が感じられるが,思想的なことから総合して見つめると,モンテッソーリ・メソッドと宗教教育が存在していたのではないのだろうか。このように,調和的人間形成を図りながらモンテッソーリ教育学において神による愛と知性,情緒豊かなファンタジーが重んじられたことは,こどもが客観的・抽象的思考へと心を開く動機付けとなり,後の成長では道徳的な成長を遂げられるきっかけに結ばれている。

6. 考察とまとめ

モンテッソーリ教育学がイタリア文化と児童文化においてファンタジーを積極的に支持しなかったことの一因として,イタリア語のファンタジー(fantasia)が,幻覚,白昼夢,亡霊(fantasma)を連想させ,創造的意味を持たない傾向があることに関連しているのではないだろうか。

マリア・モンテッソーリは,研究において現実を土台として発展させていく想像

力（immaginazione）を大切にしていた。

しかし,イタリアのファンタジーと呼ばれるものは,北ヨーロッパのように現実を超えたところに非日常的な幻想（ファンタジー）を見るのではなく,現実を五感と感覚器官に訴え,身体表現でダイナミックに表現する「劇的場面」に自己を置きながら非日常化することであった。従って,モンテッソーリ教育学にファンタジーが欠けるという評価は適正ではなく,表現の仕方の違いがあり,愛と夢が込められた幼子の育ちに重要なファンタジーが存在していたと考える。

いま,私たちが生きている世界は,魔法のような奇跡に満ちている。しかし,現実は,欲望と妬みも存在し,多重構造の人間模様がある。私たちの周囲に実在すると言われているもの全てが人間の想いの及ぶものばかりではない。宇宙・世界は,人間の予測できない範囲が広がっているが,人間は自分たちで考え,創り出していることがたくさんある。実在する確かなものは,小説やドラマよりもはるかに透明で不可解で不思議なものなのである。

我々は,ファンタジーが現実離れした架空の世界を描いたものではないことに気付かされる。ファンタジーとは,ドラマ化されたものではなく,普段何気なく心に描いていることや,こうなってほしいと願うこと,そして,起こりうるかもしれない予感でもある。ときには,我々の心の現実をすり抜けた人生の解釈になっていることもあるだろう。

モンテッソーリ教育学とファンタジーは,見えないものが見え,聞こえない声が聞こえる。もう少し目線を遠くにすると見えるものでもあり,聞こえてほしい音楽であったりもする。モンテッソーリ教育学は,こどもが神秘であり,奇跡であることを追求している。ファンタジーと現実社会は,その境界が非常に曖昧に感じ取れるため,児童文化では,童話・紙芝居・絵本・物語,小説,伝記など,それぞれにジャンルを置きながら,それぞれの持ち味を大切にした伝承を行っている。宗教的な寛容や慈愛の精神は,ファンタジーとして児童文化に引き継がれているように推察する。イタリア文化に深く根ざしたこどもへの愛情は,本稿で語り尽くせないが,モンテッソーリ教育学における「自由と秩序」,「自発性の尊重」などの願いは,ファンタジーの変容を踏まえながら,世界中の親子の希望として光を放っている。

7. おわりに

夏が近づく頃になると,筆者が過去に勤務していた公立幼稚園で虹を見ていたこどものことが思い出される。雨上がりの虹が空にスロープを描くと,それを見ていたこどもが,「神様が落書きしている！」と,笑顔で告げた。そのこどもの心に詰まったファンタジーを思い出すのである。

心の豊かさとは,園だけでなく,養育者の両親からも引き継がれ,ファンタジーを生むことを考えるとき,「人が人を育てる」ということの凄さに感動を得る。

引用文献

1）Jane Langton, "The Weak Place in the Cloth" p163-180, Fantasists on Fantasy, ed. Robert H. Boyer and Kenneth J. Zahorski, ISBN 0-380-86553-X.

2）大辞林（三省堂）より

3) 川成洋・長尾輝彦編 (2001)『現代イギリス読本』丸善出版,「第 5 章 イギリス現代文学 I －ファンタジーとミステリー」

4) オムリ慶子(2001)『モンテッソーリ教育誌第 34 号』日本モンテッソーリ学会, p.31

5）同上,pp.29-30.

6) Maria Montessori, クラウス・ルーメル著,阿部・白川訳（1974）『モンテッソーリ・メソッド』明治図書, p.102

7) Maria Montessori 著,鼓常良訳（1976）『幼児の秘密』国土社, p.134

8) 前掲書 4) p.32

参考文献

・『こどもの性格の正常と異常の概要』: Maria Montessori 著, 鼓常良訳（1992）『こどもの心－吸収する心－』国土社

・Maria Montessori, “Formazione dell;uomo” IX edizione『1972 』Garzanti, 坂本堯訳『人間の形成について』エンデルレ書店

・相良敦子（2001）『21 世紀に期待するモンテッソーリ教育』日本モンテッソーリ協会学会誌 第 34 号

・前之園幸一郎（2014）『モンテッソーリ教育における宗教とこども』日本モンテッソーリ協会学会誌 第 47 号

要旨: モンテッソーリ教育学思想の根底には，どのような文化的伝統が反映されているのか? 本稿では，マリア・モンテッソーリの人間を培うイタリア文化の特質を考察した。イタリア文化では，児童文化におけるファンタジーの欠如が指摘されている。しかし，モンテッソーリ教育学は，こどもの主体性と創造性を重んじている。イタリア文化を愛する人々の関係性は，親子関係にも反映していた。このことから，イタリアの時代背景の影響が考えられる。視覚的ファンタジーから眼に見えない宗教教育へ移り変わるモンテッソーリ教育学について，探っていきたい。